

令和4年4月1日

保護者の皆様

昭島市立富士見丘小学校
校長 稲垣 達也

エンパシーの時代

「さまざまのこと思ひ出す櫻哉」（俳聖 松尾芭蕉）

今年も桜の季節がやってきました。自然災害、感染症、侵略といった混沌とした社会の中でも、自然の巡りによって、今、生きていることの有難さが身に染みます。

昨年度は、“Society5.0時代”を主体的に生き抜く「富士見丘の子」として、子供たちに柔軟な発想を生み出す底力を培うことを宣言しました。そのために本校では、学びの基盤である「言語能力」「情報活用能力」「探究力」の育成とともに、「認知能力」を高め、自己有用感の向上を図ってきました。これらは、“未来の守護者”である子供たちが「新しい社会を創造」し、「なりたい自分になる」自己実現のために不可欠な能力だからです。

今年度は、更に「エンパシー」の視点を加えます。「エンパシー」とは？ シンパシーは、なんとなく聞き慣れた言葉ですが、エンパシーは、ブレイディみかこ氏が著書の中で「誰かの靴を履いてみる」と表現して、広く知られるようになったかと思えます。

シンパシーは「誰かをかわいそうだとか思う感情」で、エンパシーは「他者の感情や経験などを理解する能力」のことです。つまり、エンパシーは「感情」ではなく、他者を想像し、相手の立場で物事を考え、捉え、理解する「能力」を指します。自分と違う理念や信念を持つ人に対して、どうしてこう思ったのだろうと“想像する能力（スキル）”のことで、知的作業とも言えます。それは自分が生きやすい社会を作ることにつながります。今とは違う社会があると想像して、新たな社会を創り出していく力につながっていくのです。

これまで私は様々な機会に、子供たちに「思いやり」や「相手を許す心」など、「慮る」という言葉をキーワードに「他者理解」の大切さを伝えてきました。

また、エンパシーは、昨年度開始したコグトレ（認知機能トレーニング）の一つであるソーシャルスキルの根底にある能力かも知れません。多様性の時代と言われる中で、多様性の落とし穴に陥らないよう、他人と対峙した時に、同情（シンパシー）で見るのではなく、共感（エンパシー）で捉えることが大切です。相手を理解した上で、じゃあどうしようとか、私はこう思うよとか、自分の考えを言葉でしっかり伝え、協働しながら解決していくことができるのではないのでしょうか。

すべての大人が協働し、全力で、「自分を信じ、友を信じ、信頼できる社会を切り拓き、創造していく」子供たちを育てて参ります。

この1年、皆様と共に、希望をもって歩いていくことをお誓い申し上げます。

“Society 5.0時代”を主体的に生き抜く「富士見丘の子」（学校の教育目標）

人権尊重の精神を基調に、予測不可能な課題に自ら対峙し、協働して未来を創造する社会の一員として、心身共に健康で創造性に富み調和のとれた児童の育成を目指し、次の目標の達成に努める。

- ◎ よく考える子 自ら学びに向かい、創造力・表現力に富み、正解のない課題に納得解を導く子
 - 思いやりのある子 認知機能を高め、自分も他の人も尊重し、敬意をもって大切にできる心豊かな子
 - 健康な子 基本的な生活習慣を身に付け、運動に親しみ、心身共に健康で活力に満ちた子
 - すずんで働く子 未知の課題を思索し新たな価値観や行動を生み出し、協働して未来を創造する子
- 〔 予測できない変化を受け止め、正面から向き合い、主体的に関わろうとする子
未知の課題を思索し、AIには代替できない創造性を発揮する子 〕